



定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その9）

著者	新家 結子, 堀井 一希, 黒川 隼, 森田 菜摘, 尾浦 有梨, 中田 行重
雑誌名	Psychologist : 関西大学臨床心理専門職大学院紀要
巻	9
ページ	45-51
発行年	2019-03
その他のタイトル	Community Clinical Psychological Support of an Evening High School (IX)
URL	http://hdl.handle.net/10112/16830

定時制高校に対する地域臨床的支援の試み (その9)

Community Clinical Psychological Support of an Evening High School (IX)

新家 結子 堀井 一希 黒川 隼 森田 菜摘
尾浦 有梨 中田 行重
関西大学大学院心理学研究科心理臨床学専攻

Yuko ARAIE, Kazuki HORII, Shun KUROKAWA, Natsumi MORITA,
Yuri OURA, Yukishige NAKATA
Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

◆要約◆

ある定時制高校への大学院生による地域臨床的な支援活動は今年で9年目となった。今年度も「改訂版支援モデル（循環型）」に基づいて、校内巡回、教室内支援、グループワークの実施、先生方との情報共有、広報活動を行った。今年度からは支援日を週3日で固定することで駐在感を増やし、支援の浸透化を図ってきた。また、先生との連携が不十分であったという昨年度の反省を受け、先生方との情報共有の方法として、担当の先生を介した情報共有シート（気になるメモ）の利用を試みた。その結果、先生と口頭および書面での情報共有の機会が増えるといった効果を見ることができた。今後の支援継続においても、環境に働きかけることの重要性に留意しながら、先生方との密な連携を目指していくことが喫緊の課題となるであろう。

キーワード：定時制高校、学校支援、グループワーク

Abstract

It has been nine years since a team of graduate students began offering psychological support to an evening high school. This year, we continued to enhance support activities based on “the revised support model (circulation type)” from the previous year, by moving around in the school, mentoring the students between classes, facilitating group work, sharing students’ information with the teachers, and making our activities known by publishing a newsletter and communicating face to face. To promote awareness of our activities in the school, we have employed a fixed three-days-a-week shift. We are also using new documents, which we call “concerns memos” to share information with the teachers, because we realized that our activities were not sufficiently integrated into the school system last year. Consequently, we have been able to increase our chances of sharing information with the teachers. It has been suggested that we should continue to work closely with the teachers and to seek to improve the learning environment for the stu-

dents.

Key Words: Evening High School, Supporting School, Group Project

I. はじめに

ある定時制高校における地域臨床的な支援活動も、筆者らで9年目を迎えた（中田・中村・日野ら，2011；倉石・横谷・梅井ら，2012；山見・細見・吉川ら，2013；井上・大川・渋川ら，2014；清水・妹尾・有福ら，2015；清澤・川田・構ら，2016；松下・中森・植松ら，2017；内藤・廣瀬・坂崎ら，2018）。

2011年以降、定時制高校の支援要請に対して教員と大学院生によるチームを組み、主に大学院生がボランティアとして支援する試みが続けてきた。これまでの活動を概観すると、活動基盤の模索段階、支援モデルの構築段階、実践段階、という3つの段階の変遷を認めることができる。具体的には、活動方針・ニーズの模索段階（2011年から2013年）を経て、「改訂版支援モデル」の提唱（2014年）、さらに改良を加えた「改訂版支援モデル（循環型）」の提唱（2015年）があり、2016年以降は「改訂版支援モデル（循環型）」に則った活動が展開されてきた。清水・妹尾・有福ら（2015）が述べた「改訂版支援モデル（循環型）」とは、①浸透化⑤支援メンバー内の活動⑥先生との連携が、②グループワーク（以下、GW）③相談活動④教室内支援に相互作用しており、両者を充実させることで良い循環が生まれることを示したものである。またこの中では特に、①と⑥を継続することで支援活動の基盤ができ、より充実した支援に繋がることが指摘されている。

今年度は実践段階として、より精査された支援方法を模索することが課題となった。特に、昨年度の反省点となった“適切な活動日、活動人数の模索”、“実際に先生の一助となるような情報共有方法の模索”について新たな試みを行った。本論では昨年度以前との変更点を中心に

活動の報告を行い、その有用性について考察することを目的としている。

II. 今年度の活動経過報告

1. 基本的な活動

今年度の支援体制、活動内容を以下に簡潔に記載する。本活動は筆者ら大学院生5名（以下、支援メンバー）と1名の教員で構成されていた。支援活動時間は、給食時間から3限終了時刻（計1時間10分）であった。

昨年度の反省にあった、1回の支援メンバーは2名が妥当であること、駐在感を増すために週3回の活動が望ましいといったことを受け、今年度は原則、支援日を週3回、支援メンバーを2名にして行った。

これまでの支援同様に、校内の一室を利用した生徒相談室として“ほっとすてーしょん（以下、HS）”を開室し、相談活動を行うとともに、校内巡回、教室内支援、GWを行った。また、今年度からは先生との連携として、“気になるメモ”を各活動日の支援終了後に記入した。さらに、文化祭、餅つき大会といった学校行事への参加に加え、先生方とのミーティングも実施した。

2. 相談活動

2017年までの活動においては、生徒相談室（HS）に支援メンバーが1名以上常駐し、相談活動を行ってきた。2014年（井上・大川・渋川ら）の活動では、対応した生徒の人数は前期50人、後期42人と数多く、継続的な来室も行われていた。しかし、国公立高校の授業料無償化や、発達障害・精神疾患をもつ生徒の増加などの影響から、生徒のもつ要因がより複雑となるにつれて生徒相談室の利用頻度も下がり、昨年度には

一時閉室して校内巡回を行うことも増えていた。

支援開始前に行われた先生との打ち合わせの中では、“生徒の出席日数に影響するため極力HSではなく教室に入れるようにしてほしい”といった要望もあったため、本年度においては支援メンバーが積極的にHSに繋ぐ努力はせず、可能な限り教室内および廊下や共有スペースでの支援を行うよう心掛けた。

1学期にはHSの利用は1度もなかったが、2学期に入ると、“教室内にいづらい”“授業に参加しにくい”といった生徒を、先生が連れてくるということが数回みられた。その際には、支援メンバーがいない時間帯にはHSで先生と生徒が会話し、支援メンバーが到着すると先生から情報共有を受け、交代して会話を引き継ぐという形がとられた。

3. 校内巡回、教室内支援

今年度の支援開始時に支援担当教員と話し合いの場を設け、各教科の先生方の意向を確認したところ、教室内で支援を行うことに対して拒否的な意見は見られなかったため、年間を通して支援対象学年は固定せず、各支援メンバーが全学年の教室において支援を行った。授業に出席しない生徒と話をしたり、授業に参加しながらも話をしたいと思う生徒の話を聞いたりし、心理的な支援をすることが主であったが、勉強についていけているか、ノートは取れているかなどという学習面にも配慮し、必要に応じて学習支援も行った。学習支援においては、解答を教えるのではなく、どのようなところから、どんなところがわからないのかを聞き、一緒に考え答えを導き出す姿勢をもった。学習に大幅な遅れがみられる場合には、担任に学習面に関する共有を行った。

4. GW

2年目の活動（倉石・横谷・梅井ら，2012）以降、支援活動の一環として毎年2回、1年生を対象にGWを行っている。実施日は前期が5月、

後期が1月であり、後期のGWに関しては本論文の提出期日時点では実施されていない。よって本論文では、主に前期のGWについて詳細を述べる。

前期のGW実施時点では、学校が始まってからまだ日が浅く、生徒間でのコミュニケーションにはぎこちなさや相互理解の不十分さを感じられていた。また、今年度の1年生は年齢や国籍等がさまざまであったため、お互いの考え方や価値観の相違も大きく、時にはそれがトラブルに発展することもあった。

そこで前期のGWでは、星野（2003）を参考にして作成した『1番いい人は誰だゲーム』を実施した。活動の目的として、「価値観や考え方が人それぞれであるということに気づくこと」、および「自分の考えや価値観を相手に伝え、受け止めてもらう体験をすること」という2点を設定した。また、生徒たちの円滑なコミュニケーションを促進するには、まず生徒たちの緊張を緩める必要があると考えたため、GWの冒頭でアイスブレイクとして『無言伝言ゲーム』を行った。

実際のGWの流れとしては、まず生徒を1グループ4、5名の4グループに分け、各グループには支援メンバーを1人ずつファシリテーターとして配置した。支援メンバーのうち1人は進行役として前に立ち、ゲームの進行を行った。グループ分けに関しては、1年生のクラス担任の先生と話し合い、生徒同士の関係などを考慮して決定した。ファシリテーターに関しては、支援メンバーが普段の活動で既に関わりのある生徒と同じグループになるように配置した。ファシリテーターは、生徒全員が発表できるように、タイミングを見計らって介入することを心掛けた。

次に、アイスブレイクとして『無言伝言ゲーム』を行った。グループの生徒内でお題を伝える順番を決めてもらい、1番目の生徒にだけ進行役からお題を伝えた。お題を伝えた生徒にはグループに戻り、声を出さずにジェスチャーや

表情だけで、お題の内容を次の順番の生徒に20秒以内に伝えるように指示した。その間、その他の生徒には顔を伏せておいてもらった。それを最後の生徒まで行い、最後の生徒はグループのメンバーにお題が何だと思ったかを発表してもらった。

その後、メインのワークである『1番いい人は誰だゲーム』を行った。まず、生徒に自作の物語が書かれた紙と、ワークシートを配布した。物語は生徒にとって理解しやすく、人によって登場人物への好感度が異なるように、支援メンバー間で話し合いながら作成した。生徒には物語を聞いたうえで、それぞれの登場人物について好感が持てる順番に並べ、その理由をワークシートに記入してもらった。記入し終わったグループには、それぞれの順位とその理由について、グループ内で発表してもらった。生徒にワークシートに活動全体の感想を記入してもらった後、進行役からGWの目的を伝え、活動全体のまとめを行った。

GW終了後には、支援メンバー間でGWについての反省点や生徒の様子などを話し合い、そこで出た意見をクラス担任の先生と共有した。回収したワークシートに関しては、ファシリテーターを務めた支援メンバーが、それぞれのグループの生徒1人1人に良かった点や感謝の言葉などを記入し、クラス担任の教師を通じて返却した。

5. 情報共有

支援メンバーは、活動終了後、その日にかかわった生徒の中で、気になる生徒の発言や様子などを所定の用紙（気になるメモ）に記入し、ファイルに保管した。ファイルは職員室に保管しており、生徒に関する様々な情報を先生方と共有するためである。その日にファイリングした気になるメモの用紙は、支援担当の先生がファイルから抜き取り、その生徒の担任の先生に渡し、返事を書き込んでもらった。その後は、メモはファイルに戻し、支援メンバーが次回来

校した日に先生方からの返事を確認できるというシステムであった。また、書面では伝わりづらい内容の場合や、早急に伝えるべきであると判断した生徒の様子に関しては、各支援日の終わりや、授業中等、担任の先生の時間が空いている時間帯に職員室へ立ち寄り、口頭で情報共有を行った。

前期・後期の各期の活動開始前に、先生方のニーズを把握し、支援メンバーの活動方針を方向付ける目的で、学校と話し合いを行った。校長や、教頭をはじめとする先生方および全員が参加した。支援メンバーは予定の調整がついたメンバー（2～3人）が参加した。

6. 広報活動

昨年度に引き続き、支援メンバーの駐在感の増加、活動の浸透化を目的に種々の広報活動を行った。筆者らが初めに参加した活動は昨年度の12月に行われた餅つき大会であり、そこでは生徒との交流に加え、校長先生をはじめとした先生方との顔合わせが行われた。今年度に本格的に活動を引き継いだ後、始業式に出席し、新入生を含む全校生徒および先生方に向けて、支援メンバーの紹介や活動内容の説明を行い、HSについての広報用紙を配布した。

2015年（清水・妹尾・有福ら）から開始した“ほっとステーション通信（以下、HS通信）”について、今年度も継続して作成、配布をした。形式としては昨年度に引き続き、HS開室日カレンダーや支援メンバーの名前、顔写真を入れ、心理学に関するコラムを掲載した。また、本年度は年間を通して3回、HS通信を配布した。

Ⅲ. 考察および今後の課題

1. 基本的な活動

支援メンバーの活動日を週3日に設定したことで、支援メンバーが生徒や先生と関わる機会が増え、より深い関係を築くことに繋がったと考えられる。また、各回2名で担当したことに

より、1名が教室内支援している間に、もう1名が先生と口頭で相談や報告をする体制を取ることが可能となったため、支援メンバー間で融通を利かせながら、より臨機応変に学校側のニーズに応じることができたのではないだろうか。

また、昨年度には連絡の行き違いから、学園祭の一部にしか参加することができなかったが、その反省から今年度は連絡を丁寧に取ったことで、準備段階から片付けに至るまで支援メンバーが見学、参加することができた。こういった学校行事の中で、実際に支援メンバーが関わりながら、生徒間の関係性や、授業中と異なる態度などを見ることができたことは、関係性の構築、生徒のアセスメントとしても貴重な機会であったと考えられる。

2. 相談活動

経過報告でも触れたように、今年度の活動では生徒相談室（HS）の利用は数回程度のみであった。その要因には、生徒の質の変化に加え、先生方に“授業参加を妨げられているのではないか”といった不信感があったと考えられる。

しかし、1学期の間に毎回の活動報告（気になるメモ）、口頭での相談といった連携を行い、先生の誤解や不信感が緩和されたことが、2学期以降の利用に繋がったのではないかと。

今後の活動においても、HSの利用を支援メンバーが主体的に繋ぐのではなく、支援を要する生徒について先生と連携を取っていくことで、自ずとHSに繋がるのではないかと。そのためにも、支援メンバーが何を目的にどういった支援を行うことができるのかということ先生方へ適切に説明できるということが最も重要であろう。

3. 校内巡回、教室内支援

複数の支援メンバーが、各生徒の登校意志やクラス内の雰囲気や安定しにくい1年生の教室に入る機会が多く、関わることの少ない学年があった。表面的には落ち着いて見えても進路や家庭環境、友人関係に関する悩みを抱える生徒

に、後期の活動時まで気がつくことができなかったことを鑑みると、各メンバーで担当クラスを決めて一人一人の生徒と深いコミュニケーションを試みることも検討すべきであろう。

また、生徒個人と関わるのみでなく、生徒間の関係性に配慮し、クラス全体の集団力動に目を向け支援することを心掛けた。先生と、生徒の情報や各メンバーの考え、心理的視点を共有し、関係性を築く中で、先生が見ている生徒の側面や先生の考え方をすることもでき生徒への理解を深めることができたと考えられる。一方で、メンバー間の情報共有は乏しく、現状に対する個人的な支援が中心となり、長期的な目標を立て目的意識を持ち、活動を行うことはできなかった。GWなど以外の日常的な活動の中でも、目的や方針を定め、継続的に支援する必要性をメンバー間で検討する必要があると考えられる。

4. GW

GWの『一番いい人は誰だゲーム』では、普段あまり関わることのない生徒同士が一緒のグループになるように、あらかじめ支援メンバー側でグループを編成していた。そのため、GWの開始直後はどことなくぎこちない雰囲気もあったが、アイスブレイクの活用やファシリテーターの介入などの要因もあり、徐々に緊張がほぐれていった。

また、GW終了後のアンケートでは、生徒の半数が「楽しかった」という感想を抱いていた。年齢や国籍、価値観などが多様であり、衝突することも多い生徒たちではあったが、GWというきっかけや、ファシリテーターという第三者からのアシストがあったことで、お互いに自分とは違う価値観や考え方を認め、そうした自分とは異なる相手を知っていくことの楽しさを、より一層感じることができたのではないかと考えられる。

5. 情報共有

内藤・廣瀬・坂崎ら（2018）は、先生方に共有ファイルに目を通してもらうことで、綿密な情報共有ができると述べている。前年度までの各学年の共有ファイルの課題として、実際には目を通していただけないことが多かった点が挙げられている。本年度からの気になるメモの活用と、支援担当の先生がメモを担当の先生に渡す作業により、確実に担任の先生から返事をいただくことができ、また、生徒に関する詳細な情報を共有することができた。

また、各期の活動開始前に学校と支援メンバーの両者で話し合いを行ったことにより、先生方のニーズを把握することができた。これにより、支援メンバーの活動方針と照合し、支援メンバーの活動内容がある程度調整することができた。

6. 広報活動

昨年度に引き続き、心理学に関するコラムを掲載したところ、先生からの意見、感想に加え、教室内支援の際に生徒から感想を伝えられる場面もみられた。これらの成果には、継続して配布を続けたことによる浸透化に加え、教室内の支援に重点を置いたことで、より多くの生徒と関係を作ったことが寄与していると考えられる。

広報活動と実際の支援活動は綿密に関連していることが推察されたため、今後の活動においてもどちらか一方に偏ることなく、活動の両輪として機能するよう継続して行っていくことが重要である。また、支援開始前の先生との打ち合わせではHS通信を高い頻度で配布してほしいといった要望もあったが、その点について達成が難しかったため、今後の課題としたい。

IV. おわりに

昨年度の活動から、学校側のニーズの確認を怠ってきたことによって、「改訂版支援モデル（循環型）」における①浸透化、⑥先生との連携

が不十分であったという考察がなされている。今年度は、支援活動開始前に先生と打ち合わせを行い、その後も定期的に打ち合わせや口頭の相談、報告を行ってきた。また、これまで先生があまり目を通していなかった情報共有シートについて、支援メンバーの担当となった先生が他の先生との間を取り持ち、報告の用紙（気になるメモ）に担任の署名を求めたことで、用紙上および口頭で感想や報告内容についての相談を受ける機会が増加した。これらのことから、①浸透化、⑥先生との連携のどちらにおいても、支援メンバーが単独で活動するだけでは、十分な成果は望めないことは明白である。今後の活動においても、先生と連携を取りながら、生徒と頻度高く関わっていくことが、最も重要であろう。

謝 辞

今年度も貴重な学びの機会を与えてくださった定時制高校の皆様方に感謝致します。今後とも尽力して参りますので、引き続きご協力のほどよろしくお願い致します。

文 献

- 星野欣生（2003）：『人間関係づくりトレーニング』金子書房。
- 井上奈々・大川慧・渋川沙由里・中西達也・西中さおり・矢野礼花・清水達哉・妹尾美鈴・中田行重（2014）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その4）—改訂版支援モデルの提示—『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』4：11-20。
- 清澤千絢・川田麻菜美・構美穂・向坂俊佑・佐藤菜・高橋圭佑・中田重行（2016）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その6）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』6：67-74。
- 倉石百合子・横谷美幸・梅井茜・高石唯・船曳奈央・中條淳博・津田雅志・中田行重（2012）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その2）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』2：71-78。
- 松下秀平・中森涼太・植松大起・太田靖子・下 枝里子・中谷汐里・中田行重（2017）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その7）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』7：19-28。

- 内藤みなみ・廣瀬眞波・坂崎理史・坂田美幸・船越梨乃・結城晟亜・中田行重（2018）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その8）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』8：41-47.
- 中田行重・中村絢・日野唯花・丹羽由子・福山侑希・菅野百合子・横谷美幸（2011）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その1）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』1：23-31.
- 清水達哉・妹尾美鈴・有福和・羽田野瑛子・宮地佑香子・結城進矢・向坂俊佑・佐藤栞・中田行重（2015）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その5）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』5：109-117.
- 山見有美・細見知加・吉川真衣・西中さおり・中條淳博・津田雅志・中島妃佳里・井上奈々・中田行重（2013）：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み（その3）『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』3：79-87.